

# けんもつ かいご さきのすけ 桜田烈士 斎藤監物と海後磋磯之介

那珂市歴史民俗資料館



## 【斎藤監物】

名は一徳、号は文里、監物は通称である。代々静長官と称した静神社（那珂市）の神官の家に生まれ、はじめ成沢村（水戸市）の庄屋加倉井淡路（号は砂山）の日新塾に学び、神官としての教育は父から受けた。その後、藤田東湖のもとで学問にはげみ、特に書をよくし、師東湖にそっくりの字を書き東湖の代書をつとめたと伝えられている。剣は神道無念流、20歳の時に水戸藩士で兵学者であった山国兵部共昌の女お昌と結婚し、2男をもうけた。天保14年（1843）に水戸東照宮の神官となり、さらに弘道館内鹿島神社の神官も兼ねた。

弘化元年（1844）5月、藩主徳川斉昭が幕府から処罰され隠居謹慎を命じられた際には、神官らを率いて雪冤運動に奔走したことから水戸に謹慎させられたが、嘉永2年（1849）謹慎を説かれて帰宅した。その後斎藤道場を開き、大宮・野口の郷校でも文武の指導に当たった。安政5年（1858）、大老井伊直弼は日米修好通商条約に無勅調印、これに抗議した斉昭や吉田松陰ら多くを処罰・処刑した安政の大獄が起こった。これに憤激した水戸藩の脱藩浪士17名と薩摩藩士有村次郎左衛門らが、万延元年（1860）3月3日朝、桜田門外に於いて井伊大老を襲撃。この時監物は、神官仲間の本米崎三嶋神社（那珂市）の海後磋磯之介と古内諏訪神社（城里町）の鯉淵要人らと襲撃に加わった。いわゆる桜田門外の変である。その時、監物は重傷を負いながらも斬奸趣意書を老中脇坂安宅邸に届け、その夕刻には肥後藩細川越中守邸に預けられた。その後、傷跡はますますひどくなり3月8日朝に死去した（39歳）。辞世の歌は、万葉かなで書かれている。（写真は監物の墓碑、静神社前池の前丘の墓地内）

藝微賀堂免 都母類於茂飛毛 天津日耳 登計亭羽礼志幾 家斜能阿波由岐

「きみ（君）がため つもるおもひも あまつひに とけてうれしき けさ（今朝）のあわゆき（淡雪）」

この歌は、細川邸の好意により手にした山国兵部（68歳）が監物の妻である娘お昌に送られた。娘婿の最期を知らせ、今後の覚悟を新たにさせようとした老父の思いであろう。この朝、雪は3寸（約10センチ）ほど積もったともある。なお、3月3日は太陽暦では3月24日にあたる。兵部は、元治元年（1864）の争乱で天狗派の武田耕雲斎・藤田小四郎らと西上、その途中で加賀藩に降伏し処刑されている。

## 【海後磋磯之介】

本米崎の鎮守三嶋神社神官の4男に生まれ、諱（いみな）を宗親という。兄と共に神職を継いだが、大志を抱き常に国事を思った。大久保暇修館で学んだ後、水戸の会沢正志斎の教えを受け、弘道館や神勢館にも学んだ。先輩高橋多一郎や斎藤監物と親しく交わり、佐野竹之介とは最も親しかった。安政5年（1858）の徳川斉昭処罰抗議や水戸藩に下った密勅の返納反対に奔走の後、桜田門外での井伊大老襲撃に参加した。決意は、「国の為思へつくさんことのはに きゆるもうれし露の玉のを」に表れている。

事変後は自訴することも、大坂行きも果たせず郷里に帰り、兄の養子先である小田野（常陸大宮市）の吉田神社の神官高野家に潜伏した。その後は会津・越後へと移り、文久3年（1863）に帰宅して菊池剛蔵と変名。その後起こった天狗・諸生の争乱では那珂湊の戦いにも参加している。明治に入って、東京警視庁や茨城県の警官を務め、明治36年（1903）5月19日に76歳で歿した。墓地は水戸市常磐共有墓地にある。磋磯之介は、桜田事変についての手記「春雪偉談」を残している。

